夏の風物詩 三成 大呂 愛宕祭盛大に

三百年の記念祭 三成愛宕祭

八月二十四日、二十五日の両日、三成愛宕祭が盛大に開催されました。

今年は、記録によると、一七一一年から三百年目となり、その節目として開催されました。

会場周辺の国道には、開催をPRしようと、商工会三成支部の協力により、三百年にちなみ三百本の赤色の幟旗が立てられ、開催ムードを盛り上げていました。

二十四日の本祭りでは、若者約百人による「仁多御輿連」の御輿担ぎや仁多乃炎太鼓の勇壮な祭囃子、山陰を中心に活躍するシンガーソングライターの六子さんによるライブや「世界とつながる島根づくり助成金事業」で招いた、韓国の重要無形文化財に指定されている伝統芸能、醴泉通明（イェチョン・トンミョン）農謡など、多彩な仁輪加パレードで賑わいました。

斐伊川沿いでは、約一千発の花火が打ち上げられると、訪れた人たちは、華やかに彩られた夏の夜空を眺め、祭りを満喫していました。

会場となった通りには多くの露店が並び、多くの人出で、夜遅くまで夏祭りの熱気に満たされていました。

▲300本の幟旗で開催PR

▲活気あふれる御輿担ぎ

夏の夜を彩る山車行列 大呂愛宕祭

八月二十四日、大呂愛宕祭りが鳥上地区大呂地内で行われ、多くの人で賑わいました。

およそ三百年以上の歴史を持つこの祭りでは、毎年、華やかなどう屋台や、趣向を凝らしたデコ屋台などの山車行列が地区内を巡行します。

この日は、夕暮れから山車行列が、地区内を進み、大呂愛宕大権現を目指しました。

行列の先頭を進む、どう屋台には、華やかな衣装をまとった可愛らしい子どもたちが、大人たちの笛の音に合わせて、太鼓やチャンチャの音色を響かせ、夏祭りの風情に一層の彩りを添えていました。

▲情緒あるどう屋台

斐伊川源流から河口まで88キロ踏破 おろちウォーク 第10回記念大会

出雲神話の舞台である斐伊川に沿って、源流から河口までの約八十八キロを三日間かけて踏破する「おろちウォーク」が、八月二十七日から二十九日までの三日間、島根県ウォーキング協会などが組織する実行委員会の主催で行われました。

平成十三年に始まり、第十回を向かえた今回は、北海道から熊本まで全国各地から約六十人が参加しました。

初日には、開催十回目を記念し建立された記念碑の除幕式が、参加者・関係者出席のもと行われました。これまで踏破した思い出を振り返りながら、記念碑完成を祝いました。

またこの日は、往復十キロの船通山登山に挑戦し、夏山の風に吹かれながら、爽やかな汗を流しました。

二日目からは、ヴィラ船通山「斐乃上荘」を出発し、黄金色に色づき始めた稲穂や、穏やかに流れる斐伊川の流れを眺めながら、出雲市の斐伊川河口を目指しました。

▶ヴィラ船通山駐車場に建立された記念碑

▲高校生に負けまいと懸命な「横高と共に歩む会」

▲仲間の声援を受け必死に綱を引く高校生

高校生と地元住民が綱引き対決

横田高校生と地元稲田自治会下場常会が綱引きで対決するというユニークなイベントが、九月二日、高校体育祭に併せ開催されました。

これは、井上町長と下場常会で組織した「横高と共に歩む会」が主催し、「地域に学ぶ子どもは地域で育てる」環境を作ろうという目的で、地域交流も兼ねて行われました。

歩む会を代表して井上町長が、負けた場合には、校門下通学路の草刈りを行うという条件を附した「挑戦状」を読み上げ、高校生がこれを受ける形で対決が始まりました。

対決は、両者十人ずつ、三本勝負で行われ、生徒や教員、多くの住民が観戦し、大きな声援が送られる中、歩む会が二本先取し勝利しました。

横田高校生徒会長の山守宏明さんは「地域の方々と交流させて頂き、これから自分たちが社会に出ていく上で、とても良い経験になりました」と話されました。

また、横田高校の佐藤勇人校長は「開催するにあたり不安な面もあったが、生徒たちが話し合い、無事やり遂げてくれた」と生徒たちを称えました。

大盛り上がりを見せたこの綱引き対決は、高校生、歩む会両者に好評で、来年以降の開催も考えられています。

地域医療を守るため連携 奥出雲町地域医療確保推進協議会 設立

地域医療の確保が大きな課題となる中、自治会長会連合会などの住民組織の代表者五人が発起人となり、「奥出雲町地域医療確保推進協議会」の設立総会が、八月三十日、奥出雲健康センターで開催されました。

この協議会は、自治会長会連合会、婦人会、老人クラブ連合会、PTA連合会などの住民グループの代表や、奥出雲病院、開業医などの医療関係者のほか、福祉団体、行政関係者など約五十人で構成されます。

発起人であり協議会会長に就いた自治会長会連合会の岩佐捷治会長は「協議会という皆さんの集まる場を作り、皆さんとともに、地域医療を考え行動する輪を広げていきたい」とあいさつし、地域医療を守るための連携を呼びかけました。

また協議会最初の事業として、島根大学医学部地域医療支援学の谷口栄作教授を講師に迎え、「奥出雲の地域医療を考える」と題した講演会が行われました。

谷口教授は「地域医療再生に特効薬はない」としながらも、「地域医療を守り、充実させるためには、医師・患者・地域・行政が地域医療の現状について、共通認識を持ち、ともに考え連携していくことが重要」と話し、地域医療が抱える課題解決に向けての糸口を探りました。

今後協議会では、医療・保健・介護及び福祉関係者と協議会メンバー、住民との交流会実施を中心としながら、地元出身の医療人材名簿の作成や面接活動など課題解決に直結する活動も行われる予定です。